

ヘンリー3世治世時における行政改革

The administrative Reforms in Henry III

川 瀬 進

分野：経済史：イングランド経済史332.33

キーワード：封建制度、マグナ=カルタ、摂政 (Regency)、イングランド議会、十字軍従軍誓願 (vow)、ウッドストック条約 (the Treaty of Woodstock)、アジェンダ (Agenda：政策課題、政策指針)、オックスフォード約款 (The Provisions of Oxford)、ウェストミンスター約款 (The Provisions of Westminster)、アミアン協定 (Treaty of Amiens)、リュイスの戦い (the Battle of Lewes)、イヴシャムの戦い (the Battle of Evesham)

I はじめに

ジョン王 (John, known as Lackland, also Sword-of Lath, 1167.12.24-1216.10.19：在位1199-1216) は、1213年5月13日、枢機卿スティーヴン=ラングトン (Stephen Langton, c. 1150-1228) を、カンタベリー大司教として迎え、そして、2日後の1213年5月15日に、ローマ教皇インノケンティウス3世 (Innocentius III, c. 1160-1216.7.16：在位1198-1216) に対し、封建家臣として、イングランド王国を寄進し、オマーージュ (Homage：臣従礼) を執ることにより¹⁾、1208年3月24日のインターディクト (Interdict：聖務執行禁止) が解除させ、1212年の王位の廃位教書 (a bill of deposition) が破棄され、再度、イングランド国王として認められた。

言い換えると、この解除、破棄以来、ジョン王は、ローマ教皇の封建家臣としての地位でイングランド王になれたのである。

その後、ジョン王は、1215年6月15日に調印したマグナ=カルタ (Magna Carta：大憲章) が不服であり、教皇インノケンティウス3世に訴え、支援

1) Austin Lane Poole, From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 457.

を取り付け、2カ月後の1215年8月24日に、マグナ=カルタの調印を破棄した。

この破棄により、ジョン王は、以前のように、喪失した大陸領土回復のため、フィリップ2世 (Philippe II, Auguste : オギュスト尊厳王, 1165.7.21-1223.7.14 : 在位1180-1223) と戦い、自国民に対し、圧政および恣意的な重課税を行った。

この圧政及び恣意的な重課税に対し、バロン (Baron : 君主から直接、封土を受け取っている家臣、貴族 : 国王からの直接受封者)、富裕な市民層たちは、耐えきれず、ジョン王との対立、内乱、いわゆる第1次バロン戦争 (the First Barons' War, 1215-1217) を引き起こした。

この内乱を、有利に進めるために、反乱バロンは、フランス王フィリップ2世の長男であり、またジョン王の姪ブランシュ=ドゥ=カスティーユ (Blanche de Castile, 1185-1252.11) の夫であるルイ (Louis : その後のルイ8世 Louis VIII, 1187.9.5-1226.11.8 : 在位1223-1226) に援軍を求めた。

イングランドの反乱バロンに、援軍を要請されたフランス王皇太子ルイは、自身の妻ブランシュ=ドゥ=カスティーユの母が、ヘンリー2世の次女であり、法的に王位継承権があるという大義名分にて、海峡を渡り、ロンドンにやって来た。

皇太子ルイは、即、1216年に、ロンドンとウィンチェスターとを、占領した。

この結果、ジョン王は、ロンドン退却後、フランス軍、すなわち自身の姪の夫ルイと戦わざるを得なかった。

1216年10月9日、遠征地、イングランド東部のリーン (Lynn : リンカーン Lincoln) にて、ジョン王は、過度の飲食により、体調を崩し、赤痢 (dysentery) に罹ってしまった²⁾。

2) George Burton Adams, *The History of England: from the Norman Conquest to the Death of John (1066-1216)*, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 2, reprinted of 1905, edition. AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 445.

赤痢に罹り、肉体的に、急に衰えていったジョン王は、1216年10月12日、ウォッシュ(The Wash)河口の砂地を横切って進軍している時、戦利品、財貨、財宝を積んだ荷車を、大波と共に砂地の中に吸い込まれ、紛失しまった。

その夜、ジョン王は、財宝等の紛失により、スワインズヘッド=アベイ(Swineshead Abbey)にて、桃の自棄食いと、新シードル(Cidre：リングの発泡酒)の飲み過ぎで、ヨリ体調を壊してしまった。

赤痢に罹り、さらに過度の飲食にて、ヨリ精神的にも肉体的にも弱っていったジョン王は、休息と、手当のため、1216年10月16日、ニューアーク(Newark)陣地に来た³⁾。

だが、赤痢に対する手当での甲斐もなく、ジョン王は、1216年10月19日に亡くなった⁴⁾。

この時、ジョン王と、王妃イザベラ=オヴ=アングレーム(Isabella of Angoulême, 1188-1246.5.31：フランス中西部地方ポトゥー Poitou 出身)との長男ヘンリー(Henry, 1207.10.1-1272.11.16)は、わずか9歳であった。

バロン戦争が勃発した異常な情勢の中、長男ヘンリーは、1216年10月28日、グロスター寺院(Gloucester Cathedral)にて、戴冠式を行い、イングランド王ヘンリー3世(Henry III：在位1216.10.28-1272.11.16)となった。

9歳の未成年ヘンリー3世にとっては、当然、イングランド王国を、統治できない。

そこで、ヘンリー3世にとっては、未成年王に代わって、実質的に国政を指揮する摂政が必要になる。

この摂政が、未成年期ヘンリー3世の性格にかなりの影響を与えた。

言い換えると、ヘンリー3世の性格は、未成年期の摂政によって培われていった、といっても良いであろう。

成人となり、イングランド王に就いたヘンリー3世は、王としての最大のアジェンダ(Agenda:政策課題)を、父ジョン王から続いている内乱の終結、

3) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 485.

4) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 445-446.

ウェイルズへの支配力の回復、およびフランスでの失地の回復に向けた。

この内乱、支配力回復、失地回復のためには、当然、戦費が掛かり、増税を行わなければならない。

増税を行うということは、当然、バロンたちからの反発を受ける。

この反発、いわゆる増税問題の発生である。

すなわち、この増税問題の解決、バロン戦争の終結、ウェイルズでの権力拡大、フランスでの失地回復が、ヘンリー3世の戴冠後の最大命題であった。

これらの事柄が解決されて初めて、イングランド経済が安定し、繁栄がもたらされるのである。

そこで本稿では、ヘンリー3世が、未成年期において、摂政にどのような影響を受けたか、また父ジョン王から続いていたバロン問題をどのように解決させたか、さらにウェイルズ問題、フランスでの失地回復問題を解決させるための経費を、どこから捻出させようとしたかを、時系列を追いながら考察する。

Ⅱ 未成年期

(a) 初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの摂政

12世紀前期イングランド内乱時、ブロアのステイーヴン王 (Stephen de Blois, c. 1096-1154.10.25 : 在位1135-1154) 治世時、ウィリアム＝ザ＝マーシャル (William the Marshal : その後の初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャル William the Marshal, 1st Earl of Pembroke, c. 1146-1219.5.14 : 摂政1216-1219) の父ジョン＝フィッツギルバート＝ザ＝マーシャル (John FitzGilbert the Marshal, c. 1105-1165) は、王位を継承したブロアのステイーヴンに対し意義がありとして戦った武人であった⁵⁾。

そして、ジョン＝フィッツギルバート＝ザ＝マーシャルは、国王ステイーヴン王戦うと共に、ヘンリー1世の長女アデレード (Adelaide, 1102-1167)、すなわちエムプレス＝モード (Empress Matilda: Empress Maud, 1102-

5) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 15. n. 7.

1167.9.10) 側に付き、戦った⁶⁾。

だが、その戦いの休戦時、1152年に、休戦のための条件として、プロアのステイーヴン王軍が、ジョン=フィッツギルバート=ザ=マーシャルと、2番目の妻シビル=ドゥ=ソールズベリー (Sybil de Salisbury: Sybilla of Salisbury, c. 1127 - ?) との2男6歳のウィリアム=ザ=マーシャルを、人質として捕らえた。

2カ月後に釈放されたウィリアム=ザ=マーシャルは、2男であるが故に、相続する土地、財産も無いので、自分自身の力で、生活費を自身の力で稼がなければならなかった。

それゆえ、ウィリアム=ザ=マーシャルは、12歳の頃、ナイト (Knight : 騎士) になるべき教養、体力、技術を身につけるため、母親の従兄弟ウィリアム=ドゥ=タンカーヴィル (William de Tancarville, 1070- c. 1130) にあずけられた。

そして、ウィリアム=ザ=マーシャルは、フランドルからルイ7世 (Louis VII, 1137-1180) のフランス軍が侵攻して来た北部ノルマンディーの戦いにおいて、武人としての戦いぶりが評価され、1166年、ナイトに叙せられた。

だが、その戦いにおいて、ナイトのウィリアム=ザ=マーシャルは、満足のできる戦いができなかった。

1167年、ナイトのウィリアム=ザ=マーシャルは、生活のため、ウィリアム=ドゥ=タンカーヴル主催の馬上槍試合に初めて参加した。その馬上槍試合において、ウィリアム=ザ=マーシャルは、勝利し、ナイトとして生きていく道を選んだ。

言い換えると、ナイトのウィリアム=ザ=マーシャルは、馬上槍試合を天職として、生きていくべき術を知ったのである。

6) ヘンリー1世の長女アデレードは、1114年1月7日、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ5世 (Heinrich V, c. 1081-1125 : 在位1106-1125) と結婚した時、自身の名前アデレードから、母の名前モード (Maud:マティルダ Matilda) と改名し、そして皇后となり、エムプレス=モード (Empress Maud : エムプレス=マティルダ Empress Matilda) と呼ばれるようになった。

さらに言い換えると、相続する土地も財産も無いナイトのウィリアム＝ザ＝マーシャルは、自身の経済基盤として、馬上槍試合を、ビジネスと考えたのである⁷⁾。

その後、ナイトのウィリアム＝ザ＝マーシャルは、ウィリアム＝ドゥ＝タンカーヴルのもとを離れ、司法と行政を学ぶために、母親の弟の叔父初代ソールズベリー伯パトリック (Patrick of Salisbury, 1st Earl of Salisbury, c. 1122-1168) に仕えた。

1168年に、叔父パトリック＝オヴ＝ソールズベリーが、ルイ7世のナイトであるギユ＝ドゥ＝リュジニャン (Guy de Lusignan, c. 1150-1194.7.18) の待ち伏せによって殺された。その時、叔父にお供していたナイトのウィリアム＝ザ＝マーシャルは、傷つき、ギユ＝ドゥ＝リュジニャン軍に、捕らえられた。

捕虜になったウィリアム＝ザ＝マーシャルは、その時のナイトとしての活躍ぶりが、ヘンリー2世 (Henry II, Curtmantel, 1133.3.5-1189.7.6 : 在位 1154-1189) の妻アリエノール＝ダキテーヌ (Aliénor d'Aquitaine : Eleanor of Aquitaine, c. 1122-1204.4.1) に伝わり、賞賛され、王妃の保釈金によって、1169年に解放された。

1169年に、王妃アリエノール＝ダキテーヌの保釈金によって自由の身になったナイトのウィリアム＝ザ＝マーシャルは、王妃に恩義を感じ、王妃の2男アンリ (Henry, 1154.2.28-1183.6.11 : 後のイングランド王ヤング＝ヘンリー, the Young Henry : ル＝ジューン＝アンリ Le Jeune Henry : 在位 1170.6.14-1183.6.11) に仕え、王宮において、彼にナイトとなるべき教養を教える役目に付いた⁸⁾。

その時、この王宮において、ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、国王の行う司法と行政、さらに経済について学んだ。

1169年のイングランド内乱時、ヘンリー2世は、2男アンリを、ナイトに叙し、そして1170年6月14日、ウェストミンスター＝アベイ (Westminster

7) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 315.

8) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 315.

Abbey) で、ヨーク大司教もと2男アンリの戴冠式を挙行し、イングランド王ヤング=ヘンリーにした。

1173年から1174年にかけて、ヤング=ヘンリーは、父ヘンリー2世に対し、反乱を起こした。この時、ウィリアム=ザ=マーシャルは、ヤング=ヘンリー側に付いていた⁹⁾。

赤痢 (dysentery) により末期的状況にあったヤング=ヘンリーは、ウィリアム=ザ=マーシャルに対し、自身の誓いとして、十字軍に参加することと、聖地パレスティナ (Palestina) に行き、テンプル騎士団のマントを持ち帰り、亡骸に掛けてくれることを、遺言した¹⁰⁾。

1183年6月11日に、ヤング=ヘンリーが亡くなった後、ウィリアム=ザ=マーシャルは、彼の遺言とおり、2年間、十字軍に参加し、聖地パレスティナに詣でた。

十字軍の参加後、ウィリアム=ザ=マーシャルは、ヘンリー2世に仕えるようになった¹¹⁾。

ナイトのウィリアム=ザ=マーシャルは、ヘンリー2世が、自身の息子3男リシャール (Richard, duchy of Aquitaine, 1157.9.8-1199.4.6 : 後のリチャード1世 Richard I, the Lion Hearted, Cœur de Lion : 在位1189.9.3-1199.4.6) に反抗を受け続けていた時、3男リシャールと戦い、彼を落馬させ負傷させていた¹²⁾。

また、ウィリアム=ザ=マーシャルは、ヘンリー2世が、1189年7月6日、シノン城 (Chinon Castle) で亡くなるまで、彼に仕えた¹³⁾。

その後、ナイトのウィリアム=ザ=マーシャルは、敵対関係にあったリチャード1世から赦しを得、リチャード1世の勧めで、1189年8月、ウェ

9) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 336.

10) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 341.

・Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 336.

11) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 347.

12) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 347.

13) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 346.

イルズのペンブローク伯リチャード＝ドゥ＝クレア (Richard de Clare, 2nd Earl of Pembroke, 1130-1176.4.20 : 愛称、ストロングボウ Strongbow : 強弓) の娘、女子相続人であるイザベル＝ドゥ＝クレア (Isabel de Clare, c. 1170-1220) と結婚した。

この結婚により、ナイトのウィリアム＝ザ＝マーシャルは、アールダム (Earldom : 伯爵) になり、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャル (William the Marshal, 1st Earl of Pembroke, c. 1146-1219.5.14 : 摂政 1216-1219) になった¹⁴⁾。

言い換えると、この結婚により、ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、相続領地を持たないナイトから、瞬時に、イングランドの中で、広大な領地を保有し、発言力の強い最も有力なバロンの1人に押し上がった¹⁵⁾。

1190年春、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルと、妻イザベル＝ドゥ＝クレアとの間に、長男ウィリアム (William : 後の第2代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャル William the Marshal, 2nd Earl of Pembroke, 1190-1231.4.6) が、フランスのノルマンディーで、生まれた。

1190年3月頃、リチャード1世が、第3次十字軍に参加するため、イングランドが留守になる。

その国王の留守の間、イングランド国内は、国王の代理によって統治されなければならない。

その主たる代理人は、ジャスティシヤー (justiciar: 大法官) であり、彼は、国王からの直接授封者であるバロンや、上級聖職者から成るグレイト＝カウンシル (a great council : 大諮問会) によって、国事を執り行われなければならない。

すなわち、グレイト＝カウンシル (大諮問会) が、国璽を保管し、イングランド国内を円滑に統治するということである。

14) ・ Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 347.
・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 347.

15) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 347.

さらに言い換えると、国王の居ないイングランド国内の行政、摂政を、ジャスティチャーのもと、グレイト＝カウンシル（大諮問会）が、行わなければならないということである。

なお、この当時のジャスティチャーは、イーリー司教ウィリアム＝ロンシャン（William Longchamp, Bishop of Ely, d. 1197：在位1189-1191）である。

このグレイト＝カウンシル（大諮問会）に、バロンの初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルが、高等法院判事補（assistant justice）の資格で、加入した¹⁶⁾。

1192年8月、サラディン（Saladin：サラーフ＝アッディー Salāh-al-Dīn al Ayyūb：サラーフウディー、1138-1193）との3年間の休戦協定後、リチャード1世は、戦えども成果のない第3次十字軍遠征から、1192年10月9日、船舶で帰国することになった¹⁷⁾。

その海路での帰国途中、ヴェネツィア沖合で、暴風雨というアクシデントに見舞われ、リチャード1世は、仕方なく、帰路を、急ぐあまり、友好的ではない国を横切らなければならないという危険な陸路に、不安を抱きながら、変更しなければならなかった。

その不安は的中し、陸路オーストリアにおいて、リチャード1世は、同じキリスト強国軍であるが、第3次十字軍の遠征時に、仲違いしていたオーストリア公レオポルト5世（Leopold V, Duke of Austria, ? -1194）に、1192年12月、捕らえられてしまった¹⁸⁾。

捕らえられたリチャード1世は、ドナウ川の要塞地、デュルンシュタイン（Dürnstein）のクエリンガー城（Kuenringerburg：デュルンシュタイン城 Burg Dürnstein）に幽閉された。

16) ・ Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 364.
・ Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 357.

17) ・ Christopher Tyerman, *England and the Crusades 1095-1588*, The University of Chicago Press, 1988, p. 58.

・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 362.

18) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 362.

オーストリア公レオポルト5世に捕らえられたリチャード1世は、捕虜として、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世＝バルバロッサ (Friedrich I, Barbarossa, c. 1124-1190 : 在位 1152-1190) に、さらに、1193年2月、神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世 (Heinrich VI, 1165.11-1197.9.28 : 在位 1190-1197) へ引き渡された¹⁹⁾。

このことにより、リチャード1世は、幽閉先を、クエリンガー城から、トリフェルス城 (Burg Trifels) へと移された。

リチャード1世の保釈として、神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世から、身代金、150,000マルクを要求された時、イングランド国民と、母親アリエノール＝ダキテーヌとが、保釈金を工面し始めた²⁰⁾。

イングランド国民と、母親アリエノール＝ダキテーヌとは、保釈金の内、一時金として、100,000マルクを工面した。

一時金としても、この莫大な保釈金の支払いによって、イングランド王室の財政が、逼迫してしまったことが、分かる。

この王室財政の逼迫というのは、もし王室財政が豊かであれば、当然、母親であるアリエノール＝ダキテーヌは、イングランド国民に頼ることなく、一括して、150,000マルクを支払ったであろう、だが、現実には、この身代金の支払いができなかったからである。

この王室財政の逼迫を、有能なバロンの初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、身を持って感じていた。

リチャード1世が、財宝の所有権を巡って、家臣シャリュス (the Lord of Châlus) と争っている時、すなわちシャート＝シャリュス (Château-Châlus) を包囲、攻撃中、クロスボウ (Crossbow) の矢を、左肩に受け、1199年4月6日に、42歳で亡くなった²¹⁾。

この時、次期王位継承者として、上位に、ヘンリー2世の4男ブルター

19) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 362.

20) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 375.

21) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 378.

George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 386.

2013年6月 川瀬 進：ヘンリー3世治世時における行政改革

ニュ公ジョフロワ2世 (Geoffroy II, de Bretagne : ジェフリー Geoffrey of Brittany, 1158.9.23-1186.8.19) の長男ブルターニュ公アルテュール1世 (Arthur I, de Bretagne : アーサー=オヴ=ブリタニー Arthur of Brittany, 1187.3.29-1203.4.3 : 在位1194-1203) がおり、下位に、5男ジャン (John, 1167.12.24-1216.10.18 : 後のイングランド王ジョン : 在位1199.4.27-1216.12.18) がいた。

この王位継承において、有能なバロンの初代ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルは、5男ジャン側に付き、彼を支援した²²⁾。

結果的に、5男ジャンが1199年4月27日、ウェストミンスター=アベイで、戴冠式を挙げ、イングランド王ジョンとなった。

1200年8月24日、ジョン王は、イザベラ=オヴ=アングレーム (Isabella of Angoulême, 1188-1246.5.31 : フランス中西部地方ポワトゥー Poitou 出身) と再婚した。

再婚後、ジョン王は、フランスでの失地回復のため、フランス対し、軍事行動を起こした。

だが、対フランス戦争において、ジョン王は、1204年にイングランド領ノルマンディーを失ってしまった。

そのため、1205年、イングランド王の家臣である初代ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルは、自身の領地があるノルマンディーの領地を継続して保持するために、フランス王フィリップ2世に対して、オマーージュを執った²³⁾。

当時の封建制度化のバロンは、複数の国王と契約関係、すなわち双務的關係を結ぶことが可能であったので、初代ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルの行動には、何ら問題はなかった。

22) Cf. Kenneth O. Morgan, edited by, *The Oxford History of Britain*, John Gillingham, "The Early Middle Ages (1066-1290)", Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1993, p. 148.

23) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 405-406.

だが、イングランド王ジョンにとっては、敵対するフランス王フィリップ2世へのオマージュであったので、危機感を抱かせる状況になった。

そこで、ジョン王は、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの行動を監視するために、彼の長男ウィリアム（William：後の第2代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャル）を人質として、自身の王宮で、育てることとした。

なお、長男ウィリアムの人質は、1205年から、ジョン王の命を受け、父・初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルが、1207年に、アイルランドの統治、管理のためアイルランドに派遣され、そして、その後、ウェイルズの戦争のため、1212年に招集されるまでであった。

ジョン王のノルマンディー失地に対し、バロンたちは失望し、さらに世論は、敗戦の原因が、ジョン王が妻に夢中になっていたと、非難を拡大させていった。

その結果1214年、ジョン王の妻イザベラ＝オヴ＝アングレームは、責任を取らされて、ジョン王が亡くなる1216年まで、イングランド南部のグロスター（Gloucester）で収監された²⁴⁾。

1215年6月、ジョン王は、国内不在の時、イングランドの統治を任ず、国王代理のジャスティチャー（justiciar：大法官）に、ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラを任命した²⁵⁾。

有能なバロンの初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、ジョン王の専制、恣意的重課税、悪政を、抑制かつ正していった。

また、有能なバロンの初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、ジョン王が、バロンや、裕福な市民から、1215年6月15日、王権を限定させられた憲法マグナ＝カルタに、自著捺印させられた時、ジョン王の保証人となっていた²⁶⁾。

24) Helicon Publishing Ltd, *The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, 1996, p. 191.

25) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 473.

26) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 434.

王の権利を制限させる“バロン要求諸条項 (Articles of the Barons)”が基本となったマグナ=カルタは、1215年6月15日、ジョン王に承認、強制させた憲法であった²⁷⁾。

この“バロン要求諸条項”とは、バロンが、イングランドの封建的慣習法に基づく封建的既得権を擁護するため、すなわち自身たちの利益を守るため、ジョン王に提示した要求書である。

このマグナ=カルタを、ジョン王が法的に認めるということで、1215年6月19日、バロンは、ジョン王に対し、忠誠を誓った²⁸⁾。

だが、ジョン王は、このマグナ=カルタが自身の意思とは違うので、本気で遵守する気はサラサラなく、無視していた。

このことは、ジョン王が、教皇インノケンティウス3世に対し、法的手順を踏まえていないマグナ=カルタを無効にするよう、訴えたことから分かる。

なお、教皇インノケンティウス3世は、1215年8月24日、ジョン王の訴えを認め、マグナ=カルタを無効にした²⁹⁾。

ジョン王によるマグナ=カルタの無視が、バロンの感情に火をつけ、ジョン王に造反する反乱バロンを増加させ、バロン戦争、すなわち内乱を、拡大化させていった。

この内乱は、第1次バロン戦争 (the First Barons' War, 1215-1217) と呼ばれる³⁰⁾。

その反乱バロンに支持を得たフランス皇太子ルイが、1216年5月21日、イングランド、ケント北東部、ザニット (Thanet) に上陸し、1216年9月、ロンドン占領した³¹⁾。

27) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 437.

28) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 474.

29) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 479.

30) Simon Hall, Project editor, *The Hutchinson Illustrated Encyclopedia of British History*, Reprinted of 1995, edition, Helicon Publishing Ltd, 1996, p. 33.

31) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, reprinted of 1915, ed., AMS Press, Inc., 1971, p. 149.

その時、フランス皇太子ルイは、反乱バロンによって、イングランドの王冠を、提供された³²⁾。

赤痢に罹り、死の淵に会ったジョン王は、遺言として、自身の後継者に、9歳の長男を指名し、そして、特に王子の後見人に、家臣の内、1番長老で、1番信用のおける有能なバロン、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルを推挙した³³⁾。

その後、ジョン王は、1216年10月19日、イングランド東部ニューアーク(Newark)で亡くなった。

内乱時での王位の空白時期を、少しでもなくすために、グレイト＝カウンシル(大諮問会)は、教皇ホノリウス3世(Honorius III, 1148-1227.3.18:在位1216-1227)支持のもと、ジョン王の幼い9歳の長男ヘンリーに対し、1216年10月28日、グロスター寺院(Gloucester Cathedral)にて、戴冠式挙行し、イングランド王ヘンリー3世(Henry III:在位1216.10.28-1272.11.16)にした³⁴⁾。

さらに、イングランド政府として恒常業務を行い、国王諮問会としての役割を果たしているクリヤ＝レギス(Curia Regis:王室法廷)は、ジョン王の遺言を、現実なものにするために、長老の有能なバロン、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルを中心に、1216年11月11日、ブリストル(Bristol)において、グレイト＝カウンシルを開催させ、そして初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルを、法的に、ヘンリー3世のリジェンシー(regency:摂政)にした³⁵⁾。

グレイト＝カウンシル(大諮問会)が、幼いヘンリー3世のリジェンシーに、

32)・Cyril E. Robinson, *England: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Crowell Company, 1928, p. 96.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 441-442.

33) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 446.

34) Cf. T. F. Tout, *The History of England: from the Accession of Henry III. to the Death of Edward III. (1216-1377)*, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 3, reprinted of 1905, edition. AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 3.

35) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 4.

有能なバロンの初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルを、選任したことは、イングランド王室財政にとって、利益を齎すターニング＝ポイントであった。

というのは、一介の武人ウィリアム＝ザ＝マーシャルが、ナイト、バロンという地位を得ていく間、国情として、常にフランス王からの危機、反乱バロンによる内乱を経験しており、またその危機、内乱に対処するために、多額の王室軍資金の必要性を、身を持って知っていた人物であったからである。

また、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、国王が王室財政の安定化のため、バロンたちに、重課税を課したり、恣意的増税を徴収したりしたことによって、バロンや裕福な市民の感情を害したことも、知っていた人物であった。

国王に対するバロンや裕福な市民の反発を和らげるためには、経済を安定させ、イングランド自体が富むことであった。

イングランドが富むことによって、バロンや裕福な市民から、国王に対する批判は、減少するであろう。

このイングランドの治安を安定させ、国家を富ますために、イングランド王になった幼いヘンリー3世が、まず初めに行わなければならないアジェンダ (Agenda：政策課題、政策指針)、言い換えると、摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルのアジェンダは、フランス王の皇太子ルイと、イングランドの反乱バロンとに占領されている首都ロンドンを奪還することであった³⁶⁾。

摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、イングランド王国を、フランスから守るために、王立軍と国王支持バロン軍とを、積極的に指揮していった。

この摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの積極的な指揮が功を奏し、王立軍および国王支持バロン軍が、勝利を収めていった。

36) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, Trafalgar Square Publishing, 1992, p. 106.

イングランド南東部ウィールド (Weald) 地方のウィルキン (Wilkin) で、フランス軍との激しい戦争のなか、イングランド王位を狙っている皇太子ルイは、一旦フランスに引き上げた。

だが、再度、フランス皇太子ルイが、1217年4月22日、イングランドに戻って来た³⁷⁾。

このことにより、戦争がより激化したのであるが、イングランド王立軍は、フランス軍が駐屯するドーヴァー (Dover)、ファーンハム (Farnham)、モント＝ソレル (Mount Sorrel) の各城を、より優位に、包圍攻撃でき出した。

その要因は、当然、摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの確な指揮命令と、反乱バロンたちが、幼いヘンリー3世側に寝返りだしたからである。

もともと反乱バロンたちは、ジョン王の専制、恣意的な重課税に対して、戦っていたのである。

だが、ジョン王が赤痢に罹り亡くなり、幼いヘンリー3世が王位を継承した時、反乱バロンたちは、ヘンリー3世が、マグナ＝カルタを承認し、自分たちバロンの封建的慣習法に基づく封建的既得権を遵守してくれると期待し、ヘンリー3世側に、寝返りだしたのである。

この寝返りというのは、ジョン王治世時、フランスでの領土を失ったバロンたちが、さらに、イングランド王との衝突により、イングランドの領地も、失いたくないということの表れである。

反乱バロンが、ヘンリー3世支持側に回り、イングランドに侵攻して来たフランス皇太子ルイ軍との戦いが、イングランド東部リンカーン (Lincoln) で激化し、ヘンリー3世軍、および支持軍が有利に戦いを進めた。

そのリンカーンの戦いにおいて、フランス軍が不利になり始めたため、フランス軍のペルシェ公 (Count of Perche) が、駆け付けた。

37) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 9.

だが、ヘンリー3世の王立軍の勢いは、さらに強まり、フランス軍が占拠していたリンカーン城、および街を荒らしまわった。

このリンカーンでのイングランド王立軍とフランス軍との衝突、戦争は、1217年5月20日の‘リンカーン事件 (the Fair of Lincoln)’と呼ばれる³⁸⁾。

この‘リンカーン事件’後、ペルシェ公は、ヘンリー3世軍によって、殺害された³⁹⁾。

フランス皇太子ルイは、ペルシェ公が殺害されたり、自身を支持してくれていたイングランドの反乱バロンが、離れていったり、さらに教皇ホノリウス3世が、ヘンリー3世を支持していることにより、自身のイングランド王位を、取り下げなければならなくなった。

つまり、フランス皇太子ルイは、1217年9月11日、ロンドン南部、ランベス (Lambeth) にあるカンタベリー大司教宮殿にて、和平条約であるランベス条約 (Treaty of Lambeth) を結ばなければならなくなったのである⁴⁰⁾。

この時、皇太子ルイは、イングランドを去る対価として、10,000マルクを手にし、フランスに帰った⁴¹⁾。

また、この時、摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、王権を限定させられた憲法マグナ＝カルタに、自著捺印した。

この1217年9月11日のランベス条約の締結により、第1次バロン戦争 (the First Barons' War, 1215-1217) は、終結した。

この第1次バロン戦争の終結において、ヘンリー3世は、自身の王位継承を支持し、また自身の後ろ盾になって支援してくれた教皇インノケンティウス3世と、教皇ホノリウス3世とに恩義を感じていた⁴²⁾。

このローマ教皇たちの支持・支援に対するヘンリー3世の恩義は、ローマ

38) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 11.

39) Maurice Powicke, *The Thirteenth Century 1216-1307*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 4, Second Edition, reprinted of 1962, ed., Oxford University Press, 1992, p. 12.

40) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 12.

41) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 149.

42) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 14.

教皇の封建家臣としての地位に留まるといふ以上に、教皇に従順な国王として現れていった。

だが、この当時のローマ教皇たちの最大のアジェンダ（Agenda：政策課題、政策指針）は、1国の王位継承を円滑に進めるのではなく、異教徒のイスラム教徒と戦い、全世界をキリスト教徒化にすることにあつた。その目下の目標が、ローマの地に近いイタリア南部およびシチリア（Sicilia：シシリー Sicily）の安定的なキリスト化であつた。

というのは、1197年9月28日、神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世（Heinrich VI, 在位：1165.11-1197.9.28）の死後、ローマ教皇と対立するホーエンシュタウフェン朝（Hohenstaufen）、ハインリヒ6世の長男フリードリヒ（後のフリードリヒ2世 Friedrich II, 1194.12.26-1250.12.13：神聖ローマ皇帝：在位 1220-1250.12.13：フランス名、フェデリーコ2世 Federico II：シチリア王として、フェデリーコ1世 Federico I, シチリア王：在位 1197-1250.12.13）が、1197年にシチリア王に就いたからである。

なお、フリードリヒ2世は、その後、1220年に神聖ローマ皇帝として戴冠し、フリードリヒ2世になつた⁴³⁾。

この時点で、ローマ教皇に従順なヘンリー3世は、教皇と対立する神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世と戦わなければならなくなつた。

43) 神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世の死後、その長男フェデリーコ1世（後のフリードリヒ2世）は、1197年に、シチリア王を継承したものの、ローマ皇帝の皇位は、幼少すぎて即位できなかった。そこで、皇位を巡り、ハインリヒ6世の弟で、ローマ教皇の推すオットー（Otto：後のオットー4世 Otto IV, 1175-1218.5.19）と、東ローマ帝国イサキオス2世アングロス（Isaakios II Angelos, 1156.9-1204.1.28）の娘で、シチリア共治王ルッジェーロ3世（Ruggiero III, 1175-1194：シチリア王在位 1193-1194）の寡婦になつていたイレーネー＝アンゲリナ（Irene Angelina, 1177-1208）と再婚したフィリップ＝フォン＝シュヴァーベン（Philipp von Schwaben, 1178-1208.6.21：後のドイツ王、1198-1208.6.21）との間で、争いが起こつた。結果は、ホーエンシュタウフェン家のフィリップ＝フォン＝シュヴァーベンが勝利したが、1208年6月21日に暗殺されたため、神聖ローマ皇帝の皇位は、1209年に、ヴェルフ家のオットー4世が継いだ。だが、オットー4世は、即位後にイタリア遠征を行ったため、ローマ教皇と対立、破門され、対イングランドとの1214年7月27日のブーヴィーヌの戦いに敗れ、1215年に廃位された。これによって、青年になつていたフリードリヒが、1220年に、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世として戴冠した。

具体的には、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世の支配下にあるシチリア王国への攻撃である。

(b) ウェイルズへの侵攻

第1次バロン戦争終結後、ヘンリー3世が気になっていたことは、ウェイルズのことである。

言い換えると、ヘンリー3世は、イングランド国内の安定のため、ウェイルズとの境界線で、小競り合いを続けている争いを、終結させることである。つまり、ウェイルズへの軍事介入である。

12世紀中頃のウェイルズは、ケルト系の部族国家グウィネズ (GWYNEDD)、ポウイス (POWYS)、デヒューバート (DEHEUBARTH) の3王国が存在していた。

1194年から、ウェイルズは、東南部を除き、全ウェイルズを、グウィネズのルウェリン=アプ=イオーワース (Llewelyn ap Iorwerth, the Great : 大ルウェリン known as Llywelyn Fawr : ルウェリン1世 Llewelyn I, c. 1173-1240.4.11 : 在位1194-1240) が、ウェイルズ大公 (Prince of Wales) として支配していた。

このウェイルズ大公という称号は、ルウェリン=アプ=イオーワース自身が用いていた称号で、イングランド王ヘンリー3世は、認めていなかった。

この全ウェイルズのリーダー・ルウェリン=アプ=イオーワース大公の権力が、しだいに強くなるのを危惧したジョン王は、1204年、自身の庶子ジョアン (Joan, c. 1191-1237.2.2) を嫁がせ、自身の傘下に入れようとしていた⁴⁴⁾。

だが、ジョン王の目論見は、完全に外れた。

というのは、全ウェイルズのリーダー・ルウェリン=アプ=イオーワースの軍事力が、整備、強化されていたからである。

44) ・ A. D. Carr, *Medieval Wales*, St. Martin's Press, 1995, p. 56.

・ Beverley Smith, J., "Magna Carta and Charters of the Welsh Princes", *The English Historical Review*, Vol. 99, p. 344.

そこで、ヘンリー3世は、ウェイルズへの軍事介入をやめ、懐柔策をとることにした。

具体的には、ヘンリー3世は、ウスター（Worcester）の地において、ウェイルズへの侵攻をやめる条件として、ルウェリン＝アプ＝イオーワースを家臣として、臣従礼を執らせ、そして彼を、封建的家臣とし、ウェイルズの統治を任せるという和平条約を、結ぶことにしたのである⁴⁵⁾。

言い換えると、ヘンリー3世は、和平条約である1218年3月ウスター条約（the Treaty of Worcester）締結したのである⁴⁶⁾。

この1218年3月のウスター条約により、ルウェリン＝アプ＝イオーワースは、全ウェイルズ人を統治するウェイルズのリーダーとして、またその反面、ヘンリー3世に忠誠義務を負う封建的家臣としての2重政策を行うことになった。

この時点でも、ヘンリー3世は、ルウェリン＝アプ＝イオーワースを、ウェイルズの大公として認めていない。

この時期、イングランドの国政に重大な危機が生じた。

それは、国政を左右している長老で有能な摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルが、重大な病気に罹ったからである。

病気のため、摂政初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、ロンドンから、イングランド南部、バークシャー（Berkshire）のカバシャム（Caversham）の邸宅に移されたのだが、1219年5月14日に、亡くなってしまった⁴⁷⁾。

初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルが亡くなった後、その称号は、長男ウィリアムが継承し、長男ウィリアムが、第2代ペンブルク伯ウィ

45) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 19.

46) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 57.

・ T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 15.

・ Walker, R. F., "Hubert de Burgh and Wales, 1218-1232", *The English Historical Review*, Vol. 87, p. 469.

47) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 15.

リアム＝ザ＝マーシャル (William the Marshal 2nd Earl of Pembroke, 1190-1231.4.6) になった。

ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルが亡くなった後、ヘンリー3世の摂政を任されたのは、ジョン王の最初の妻であったイザベル＝オヴ＝グロスター (Isabella of Gloucester, ? -1217.10.14) の夫ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラ (Hubert de Burgh, Earl of Kent, c. 1160- c. 1243.5.5 : 摂政 1219-1227) であった。

1220年初期、ジョン王の未亡人であり、またヘンリー3世の母であるイザベラ＝オヴ＝アングレームは、ユーグ10世＝ドゥ＝リュジニャン (Hughes X de Lusignan, c. 1195-1249.6.5) と、再婚した。

この結婚により、ユーグ10世＝ドゥ＝リュジニャンは、アングレーム伯領を手に入れ、フランス西部において、有力なバロンになった。

摂政になったケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラは、まず初めに、平穏なロンドンにて、ヘンリー3世を、イングランドの伝統に則り、1220年5月17日、正式に、ウェストミンスター＝アベイで、戴冠式を挙げさせた⁴⁸⁾。

王家の教会ウェストミンスター＝アベイで、戴冠式を挙げたヘンリー3世は、自身の気持ち、主張を現実させるために、すなわちより安定したイングランド統治のため、危険をはらんでいる全ウェイルズの討伐を決定し、1218年3月のウスター条約を、破棄した。

イングランドの実務的行政を行っているヘンリー3世の摂政ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラは、1222年、多額の軍事費を用いて、全ウェイルズの統治者ルウェリン＝アブ＝イオーワースを、討伐することになった。

すなわち、1222年のヘンリー3世による第1回目のウェイルズ侵攻である⁴⁹⁾。

なお、摂政ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラは、この第1回目のウェイルズ侵攻を、より確実に進めるために、1224年に、モントゴメリー

48) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 16. and p. 393.

49) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 24.

(Montgomery) で、新しい巨大な城を、築城した⁵⁰⁾。

この第1回目のウェイルズへの侵攻は、多額の軍事費をかけたにも拘らず、成果が上げられなかった。

言い換えると、ヘンリー3世軍は、強力な軍事力で持ってウェイルズに侵攻し、ルウェリン=アプ=イオーワース軍と戦ったが、結果は、ルウェリン=アプ=イオーワースを、捕らえることも無く、彼が以前と同様に、全ウェイルズの支配権を握ったままであった。

(c) フランス領土の危機

1223年4月、ヘンリー3世は、教皇ホノリウス3世によって、青年に達したと宣言され、自身の名前で行政に参加することができるようになった⁵¹⁾。

また、フランスでは、1223年7月14日、フィリップ2世が亡くなったので、36歳の皇太子ルイが、戴冠式を挙げ、フランス王ルイ8世になった⁵²⁾。

1224年、第2代ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルは、ジョン王と、王妃イザベラ=オヴ=アングレームとの末娘エリノア (Eleanor : 再婚後 Eleanor of Leicester, 1215-1275.4.13) と結婚した。

ルイ8世は、フランス国内の安定のため、1224年、フランスでのイングランド領に侵攻し、ヘンリー3世の母の出身地ポワトゥー (Poitou) を、占領した⁵³⁾。

ルイ8世による1224年のポワトゥーの占領により、フランスでのイングランド領は、ドルドーニュ川 (R. Dordogne)、ジロンド川 (R. Gironde)、アドゥール川 (R. Adour) 近辺と、ピレネー山脈 (Pyrenees) 間とに囲まれたガスコニュ地方だけになってしまった。

また、ルイ8世は、父フィリップ2世と同様に、当時イスラム教徒が勢力を拡大させていた南フランスのアルビ地方 (Albi) へ、十字軍遠征に出かけた。

50) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 58.

51) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 24.

52) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 153.

53) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 31.

このルイ8世のアルビジョア十字軍（Albigensian Crusade）の遠征のため⁵⁴⁾、イングランド自体は、フランスから攻撃を受けることはなかった。

1226年11月8日、ルイ8世は、アルビジョア十字軍の遠征の帰り、モントペンシール（Montpensier）で赤痢（dysentery）に罹り、亡くなってしまった⁵⁵⁾。

その後、フランス王位を継承したのは、ルイ8世の長男、11歳のルイで、1226年11月9日に戴冠式を挙げた、ルイ9世（Louis, le Sainte, 1214.4.25-1270.8.25：在位1226-1270）であった⁵⁶⁾。

当然、11歳のルイ9世は、未成年であったので、彼の摂政に、母親ブランシュ＝ドゥ＝カステイーユ（Blanche de Castille, 1185-1252.11）が就いた⁵⁷⁾。

この時、フランス王が、11歳の未成年ルイ9世であったので、イングランドへの侵攻危機が、激減された。

ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラの摂政時代も、ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの摂政時代と同様、ウェイルズのリーダー、ルウェリン＝アブ＝イオーワースとの戦争⁵⁸⁾、およびフランス領地での戦争があったものの、ヘンリー3世自身に、生命の危険が及ばされることなく、無事、親政を迎えることとなった。

Ⅲ 財政的逼迫

(a) フランス人の登庸

ヘンリー3世の未成年時代、摂政の初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルと、ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラとは、イングランド国内の司法、行政、経済を巧みに指揮し、結果的にイングランド国内の安全、安心、安定を、第1に考えていたのであり、フランスでの失地回復は、第2であった。

54) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 154.

55) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 154.

56) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 161.

57) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 4, *op. cit.*, p. 91.

58) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 23.

1227年4月、20歳になったヘンリー3世は、自身の力で、イングランドを統治する親政に乗り出した。その時、ヘンリー3世が気になっていたのは、1224年のルイ8世によるイングランド領、母の出身地ポワトゥー (Poitou) の侵攻、占領である。

ヘンリー3世のアジェンダ (Agenda: 政策課題、政策指針) の第1は、父ジョン王が失ったフランス大陸での、イングランド領の失地回復であった。

だが、ヘンリー3世が親政に乗り出した1227年4月以降も、摂政のケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラは、国王代理人ジャスティシヤー (justiciar: 大法官) の職に留まった。

また、ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラは、このジャスティシヤーの職を、1228年4月まで務め、その後も宮廷内に、実力者の1人として、留まった。

なお、ヘンリー3世は、親政に乗り出した1227年4月後、実弟リチャードを、コーンウォール伯爵に叙し、初代コーンウォール伯リチャード (Richard, 1st Earl of Cornwall, 1209.1.5-1272.4.2) にした。

ヘンリー3世は、ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラの意見を聞きながら、1229年から1230年にかけて、多額の軍事費を用いてブルターニュ (Brittany)、ポワトゥーに侵攻した⁵⁹⁾。

一方、1230年に、ノルマンディー生まれで、フランスで広大な土地を所有し、アルビジョア十字軍で名を馳せたバロン、第5代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール4世 (Simon de Monfort IV, 5th Earl of Leicester, 1160-1218.6.25) と妻アリックス＝ドゥ＝モンモランシー (Alix de Montmorency) との子供、2男シモン＝ドゥ＝モンフォール (Simon de Monfort, c. 1208-1265.8.4) が、イングランドにやって来た。

2男シモン＝ドゥ＝モンフォールがイングランドにやって来た理由は、以前、イングランドで祖母が継承していたレスター伯爵領を、再度継承・相続するためであった。

59) Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 34.

なお、2男シモン＝ドゥ＝モンフォールの祖父は、モンフォール＝ラモリー領主シモン＝ドゥ＝モンフォール (Simon de Montfort, Lord of Montfort l' Amaury)、祖母は、第3代レスター伯ロバート＝ドゥ＝ボーモント (Robert de Beaumont, 3rd Earl of Leicester) の娘アミシア＝ドゥ＝ボーモント (Amicia de Beaumont) である。

第5代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール4世には、長男アモーリー＝ドゥ＝モンフォール (Amaury de Montfort)、2男シモン＝ドゥ＝モンフォール、3男ガイ＝ドゥ＝モンフォール (Guy de Montfort, ? -1220.7.20) の3人がいた。

第5代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール4世が、1218年に亡くなる前に、3男ガイ＝ドゥ＝モンフォールは、1216年11月6日に、アキテーヌ南部の小領主、ビゴールの女子相続人ペトロニール (Petronille, Countess of Bigorre) と結婚し、父の相続から外れた。

第5代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール4世の死後、兄弟での相続が話し合われて、長男アモーリー＝ドゥ＝モンフォールは、父のフランス領地を相続する代わりに、イングランドでの相続を諦めることになった。

また、2男シモン＝ドゥ＝モンフォールは、フランスでの相続領地を諦める代わりに、イングランドでのレスター伯爵領を請求することになった⁶⁰⁾。

この話し合いの結果、長男アモーリー＝ドゥ＝モンフォールは、アモーリー＝ドゥ＝モンフォール6世 (Amaury VI de Montfort) になり、2男シモン＝ドゥ＝モンフォールは、レスター伯爵の爵位を、ヘンリー3世から叙せられるまで、兄アモーリー＝ドゥ＝モンフォール6世から、400マルク受け取ることになった⁶¹⁾。

言い換えると、2男シモン＝ドゥ＝モンフォールは、自身の領地を確保するために、以前、祖母が保有していたレスター伯爵領を、再度保有するために、

60) Levi Fox, "The Honor and Earldom of Leicester : Origin and Descent, 1066-1399", *The English Historical Review*, Vol. 54, p. 395.

61) Levi Fox, *The English Historical Review*, Vol. 54, *op. cit.*, p. 395.

言い換えると、その再度保有の請求を、ヘンリー3世に認めてもらうために、イングランドに来たのである⁶²⁾。

なお、この母方のレスター伯爵領は、ジョン王によって没収されていた。

ヘンリー3世にとって、このフランスからやって来たシモン＝ドゥ＝モンフォールが、自身にとって、敵でないことが分かった。

そこでヘンリー3世は、1231年、シモン＝ドゥ＝モンフォールが、自身に対して、オマーージュ（Homage：臣従礼）を執ったので、シモン＝ドゥ＝モンフォールを、レスター伯爵に叙した。

レスター伯爵領を授けられた、シモン＝ドゥ＝モンフォールは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール（Simon de Monfort, 6th Earl of Leicester, c. 1208-1265.8.4）になった。

ヘンリー3世に気に入られた義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、王の執事として働き、王宮内、イングランド内で権力を拡大し始めた。

なお、この第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの最終的な叙任手続きは、1239年4月11日に行われた⁶³⁾。

(b) バロンの反発

ヘンリー3世は、1231年にも、多額の経費をかけ第2回目のウェイルズ侵攻を行った⁶⁴⁾。

1222年と1231年のとの2つのウェイルズ侵攻は、成果が上げられなかった。

成果が上げられなかったということは、支配地から税金を奪取できないから、王室財政がヨリ逼迫していく、ということの意味している。

62) Cf. Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 75-76, and n. 1.

63) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 56.

64) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 38.

また、王室財政が逼迫するということは、ヘンリー3世自身の権力が、ヨリ制限されるということの意味する。

ポワトゥーが、依然として、フランスに占領されたことを重要視したヘンリー3世は、王の恣意的増税を禁止したマグナ=カルタを、無視した。

この時点で、ヘンリー3世は、摂政ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルと、ケント伯ヒューバート=ドゥ=バラとの努力を、無駄にした。

というのは、フランス皇太子ルイによるイングランド占領という危機を、摂政ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルと、摂政ケント伯ヒューバート=ドゥ=バラとが、マグナ=カルタを認めることにより、反乱バロンによる内乱を終結させ、皇太子ルイを、フランスに追い払うことにより、回避していたからである。

ヘンリー3世が、マグナ=カルタを、無視した背景には、フランスでの失地を回復させたいという国王としての気持ちよりも、それ以上に王自身の利己的な資質に、問題があつと言わざるを得ない。

ヘンリー3世は、1236年1月14日、フランス王ルイ9世の王妃マルグリット=ドゥ=プロヴァンス (Marguerite de Provence, c. 1221-1295.12.21) の妹エリナー=オヴ=プロヴァンス (Eleanor of Provence, 1223-1291.6.26 : エレオノール=ドゥ=プロヴァンス Éléonore de Provence) と結婚した⁶⁵⁾。

ヘンリー3世は、この南フランス出身のエリナー=オヴ=プロヴァンスとの結婚によって、王室財政をヨリ逼迫させた。

というのは、この結婚後、王妃エリナー=オヴ=プロヴァンスの叔父8人が、イングランドにやって来て、ヘンリー3世が自身の地位をヨリ固めるために、叔父8人に、イングランドの土地と、高い地位を与えたからである⁶⁶⁾。

高い地位の主なもの、第1に伯爵、第2にヘレフォード司教、第3にカンタベリー大司教の職である⁶⁷⁾。

65) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 54.

66) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 54.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 74.

67) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 98.

具体的には、サヴォイのピーターを、サヴォイ伯爵 (Peter, Count of Savoy : 在位1263-1268) へ、また大司教アビンドンのエドモンド (Edmund of Abingdon) が亡くなると、サヴォイのボニフェイス (Boniface of Savoy : 在位1240-1270.7.14) を、カンタベリー大司教への登庸である⁶⁸⁾。

ヘンリー3世が、このフランス南東部サヴォイ出身の親類者たちに、政府の重要な要職に登庸したことによって、ヘンリー3世と、実弟コーンウォール伯リチャードやイングランドのバロンたちとの亀裂が広がってしまった。

というのは、イングランドで高い要職を得たサヴォイ出身者たちは、当然、ヘンリー3世側に付き、イングランド政府への干渉を、行い出したからである。

イングランド人以外の外国人が、イングランド政府の要職に就くことに対するイングランド国民の非難は、執事の第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールにとっても、例外ではなかった⁶⁹⁾。

これらの王国内の非難にも関わらず、ヘンリー3世は、さらに、自身の地位をより堅固なものにするために、1238年1月7日、自身の妹であり、また第2代ペンブルク伯ウィリアム=ザ=マーシャルの未亡人でもあったエリノア (Eleanor : 再婚後 Eleanor of Leicester, 1215-1275.4.13) を、有能な家臣、第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールと、再婚させた⁷⁰⁾。

なお、この再婚の1年後の1239年4月11日に、義弟・第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールの伯爵としての正式な法的最終叙任手続きが終わった⁷¹⁾。

この時点までが、ヘンリー3世と、義弟・第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールとの仲が、最高に良かった時期である。

ヘンリー3世が、イングランド国内安定のため、自身の取り巻き、言い換えると重臣として、自身に縁故のある外国人を登庸し出したことには、理由

68) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 60-61.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 74.

69) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 55.

70) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 76.

71) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 56.

がある。

それは、父ジョン王の時代から、バロン戦争を経験しており、反乱バロンへの恐怖を感じており、イングランドのバロンに対し、不信感を持っていたからである。

この外国人の登庸が多くなればなるほど、当然、今まで行政の中心にいたイングランドのバロンたちは、ヘンリー3世に対し、非難、反発し出した。

このイングランドの反乱バロンたちは、やがて、ヘンリー3世に対する反対派となり、またイングランド行政に対する改革派となり、その後のイングランド議会の礎となった。

ヘンリー3世は、1239年6月17日、長男エドワード（Edward, 1239.6.17-1307.7.7：その後のエドワード1世Edward I, 1272-1307）が誕生した後以降、義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの金銭感覚の甘さから、義弟と衝突し出した。

というのは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが、第6回十字軍の遠征に参加するということで、ヘンリー3世の王妃エリナー＝オヴ＝プロヴァンスの叔父、サヴォイのトーマス2世（Thomas II of Savoy）から、借金の保証人として、承諾なしにヘンリー3世の名前を使い、巨額のお金を借りていたからである⁷²⁾。

この事実を知ったヘンリー3世は、怒り震蕩心した。

ヘンリー3世の激怒を避けるために、1239年8月、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールと彼の妻エリノアは、イングランドを離れ、交戦状態にあったフランスに逃げた。

イングランド国民的感情を無視し、自己中心的な行政を施行しているヘンリー3世は、イングランドの有力なバロンや裕福な市民層との溝を、ヨリ深くしていった。

72) Cf. G. W. Prothero, "Reviews of Books", *The English Historical Review*, Vol. I, p. 158.

(c) ウェイルズへの圧政

この頃から、ウェイルズにおいて、ウェイルズを2分する重大な危機が生じていた。

それは、全ウェイルズを統一していた、ルウェリン=アプ=イオーワースの子供たちによる相続権争いである。

すなわち、ルウェリン=アプ=イオーワースとウェイルズ出身の一般女性タングウェストル (Tangwystl) との庶子グリフィズ=アプ=ルウェリン (Gruffydd ap Llywelyn, 1200-1244)⁷³⁾ と、ルウェリン=アプ=イオーワースとジョン王の庶子である妻ジョアンとの法的相続人ダフィズ=アプ=ルウェリン (Dafydd ap Llywelyn, 1215-1246.3 : 在位1240-1246)⁷⁴⁾ との相続権争いである。

弟・法的唯一の相続人ダフィズ=アプ=ルウェリンは、父ルウェリン=アプ=イオーワースの支持を得ることによって、軍事的に勝ったので、1239年、兄・庶子グリフィズ=アプ=ルウェリンと、その長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズ (Owain Goch ap Gruffydd, d. 1282) を捕らえ、スノードン (Snowdon) 山の南西にある岩山城クリキアス=キャッスル (Criccieth Castle) に収監した。

1240年4月11日に、ルウェリン=アプ=イオーワースが、亡くなると⁷⁵⁾、順調にダフィズ=アプ=ルウェリンが、全ウェイルズのリーダー、すなわちウェイルズ大公になった。

このダフィズ=アプ=ルウェリンのウェイルズ大公という称号を、ヘンリー3世は、認めていない。

(d) フランス領土の縮小

ウェイルズ北部で内乱が生じている間、1240年、ヘンリー3世は、第6回

73) Beverley Smith, J., *The English Historical Review*, Vol. 99, *op. cit.*, p. 355.

74) Walker, R. F., *The English Historical Review*, Vol. 87, *op. cit.*, p. 471.

75) ルウェリン=アプ=イオーワースは、1240年4月11日に亡くなった以降、全ウェイルズのリーダーとして、功績が称えられ、大ルウェリンと称されるようになった。

十字軍遠征を編成するためにだけ、義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを、イングランドに呼び戻した⁷⁶⁾。

第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、イングランドで聖地遠征のための準備を行い、そして自身の軍隊は、兄・アモーリー＝ドゥ＝モンフォールの大軍隊の後に続いて、1240年夏に、イェルサレム (Jerusalem) に向かって出征した。

その時、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、妻エリノアを、教皇権を侵害していたホーエンシュタウフェン朝 (Hohenstaufen)⁷⁷⁾、神聖ローマ皇帝フリードリッヒ2世の城の1つ、プリンディジ (Brindisi) 城に残したまま、出征した⁷⁸⁾。

また、同年1240年にも、ヘンリー3世は、ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルの娘であり、最初の妻であったイザベル (Isabel, Countess of Gloucester) を亡くし、さらに反乱バロンとの密接な関係を断ち切られていた自身の弟コーンウォール伯リチャードを、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの軍隊とは別々に、聖地に向かわせた⁷⁹⁾。

ヘンリー3世が、弟コーンウォール伯リチャードを十字軍に参加させた理由は、イングランド内の反乱バロンたちと、再度、密接な関係を持たせないためである。

1240年10月8日、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、アクレ (Acre: アッコ Akko, Accho) に、上陸して来たコーンウォール伯リチャードと合流した。

その後、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、1241年6月にイェルサレムに着き、その市民パレスティナ人に、統治者になってくれと要請を受けたが、差し迫った危機がないとし、その1241年の秋に、急遽シリア (Syria) を去り、フランス軍と戦っているヘンリー3世軍の援軍として、ポ

76) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 107.

77) Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 58.

78) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 107.

79) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 61.

ワトゥー (Poitou) に駆け付けた。

第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが、1242年に、ポワトゥーに駆け付けた根本原因は、フランス王ルイ9世が、同母弟アルフォンス (Alphonse, 1220-1271) が成人に達したということで、ポワトゥー伯領、オーヴェルニュ (Auvergne) 伯領を、弟アルフォンスに封土したからである⁸⁰⁾。

このポワトゥーは、ヘンリー3世の母イザベラ＝オヴ＝アングレームの出身地である。

この一方的な封土の譲渡に対し、ヘンリー3世は、母イザベラ＝オヴ＝アングレームの再婚相手であるユージュ10世＝ドゥ＝リュジニャンと共に、再征服のため、1242年7月21日、フランスに侵入し、ルイ9世軍に攻撃を仕掛けた。

このヘンリー3世の援軍として、義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、急遽ポワトゥーの駆けつけたのである。

だが、ポワトゥーでの戦いは、フランス軍の方が優勢で、ヘンリー3世軍は、敗北に終わった。

その結果、アルフォンスは、ポワトゥー伯アルフォンス2世 (後にトゥールーズ伯も兼ねる : Alphonse II, comte de Poitou et Toulouse, 1220-1271) になった。

これらの攻撃もまた、領土の縮小に繋がり、イングランドにとって、またバロンや裕福な市民にとっても、不必要な経費の出費であった。

一方、十字軍従軍誓願 (vow) を立てていたフランス王ルイ9世は、敬虔なカトリック教徒であり、平和主義者であり、キリスト教国圏の危機以外、争いを望まなかった。

そこで、イングランドとの継続的な戦争を望まないルイ9世は、ボルドー (Bordeaux) において、5カ年の休戦条約を1243年4月7日に締結した⁸¹⁾。

というのは、ルイ9世は、自身の妻マルグリット＝ドゥ＝プロヴァンスの

80) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 62.

81) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 64.

妹エリナー＝オヴ＝プロヴァンスが、ヘンリー3世の妻であるということから、無用な争いを避け、永続的な和平を構築したいと、考えたからである。

この5カ年の休戦条約により、ヘンリー3世は、父ジョン王治世時に失ったノルマンディー (Normandy)、アンジュー (Anjou) を正式に放棄し、ルイ9世にオマージュを執ることによって、ポワトゥー (Poitou)、ギューイエヌ (Guyenne)、ガスコーニュ (Gascogne) を手にした⁸²⁾。

これにより、再度法的に、ガスコーニュが、イングランド王ヘンリー3世の手に戻った。

(e) ウェイルズへの統治権拡大

ヘンリー3世は、ウェイルズの内乱に乗じて、1241年、ダフィズ＝アプ＝ルウェリン大公に対し、収監されているグリフィズ＝アプ＝ルウェリンと、その長男オワイン＝ゴッホ＝アプ＝グリフィズとを、強制的に引き取り、ロンドン塔に幽閉していた。

幽閉されていた庶子グリフィズ＝アプ＝ルウェリンは、その3年後の1244年に、ロンドン塔の独房からロープを使い逃げ出そうとしたところ、ロープが切れ、捕まえられ、断頭台の露として消えた⁸³⁾。

さらに、ウェイルズの内乱に乗じて、ヘンリー3世は、侵攻を、再び開始した。

このイングランドとの戦いにおいて、全ウェイルズのリーダー・ダフィズ＝アプ＝ルウェリンは、1246年3月、戦死した⁸⁴⁾。

全ウェイルズのリーダー・ダフィズ＝アプ＝ルウェリンは、後継者になるべき子供を残さず亡くなってしまった。

そこで、全ウェイルズの統治権は、ダフィズ＝アプ＝ルウェリンの甥子た

82) Cf. Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, Reprinted of 1984, Oxford University Press, 1993, p. 133.

83) ・ T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 68.
・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 399.

84) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 68.

ち、すなわち庶子グリフィズ=アプ=ルウェリンの子供たちに、移った。

言い換えると、ウェイルズの統治権を法的に継承できるのは、ルウェリン=アプ=イオーワースの孫たち、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズ、2男ルウェリン=アプ=グリフィズ (Llywelyn ap Gruffydd : Llywelyn the Last : ルウェリン2世 Llywelyn II, c. 1225-1282 : 在位1246-1282)、3男ロードリ=アプ=グリフィズ (Rhodri ap Gruffydd, 1230-1315)、4男ダフィズ=アプ=グリフィズ (Dafydd ap Gruffydd, 1238-1283 : 在位1282-1283)であった。

この内、父グリフィズ=アプ=ルウェリンの支持を得ていた、2男ルウェリン=アプ=グリフィズが、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズと、3男ロードリ=アプ=グリフィズとを抑え、全ウェイルズのリーダーとなり、ウェイルズ大公の称号を得ることになった。

だが、このルウェリン=アプ=グリフィズのウェイルズ大公という称号も、ヘンリー3世は、認めていない。

ウェイルズの実際のリーダーは、ウェイルズ大公の称号を得た2男ルウェリン=アプ=グリフィズと、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズとの2人であり、この2人が全ウェイルズを、共同統治することになった。

このウェイルズ国内のゴタゴタ最中にも、イングランド軍の侵攻が、続けられており、ウェイルズは、この侵攻、戦争をやめるために、何らかの妥協策を出さなければならなかった。

すなわち、イングランドよりも軍事力に劣っているウェイルズは、ウェイルズ内の平和を得るために、イングランドの封建的家臣にならざるを得なかったのである。

言い換えると、2男ルウェリン=アプ=グリフィズと、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズとの2人の共同統治者は、ヘンリー3世に対して、オマーージュを執り、1247年4月、和平条約ウッドストック条約 (the Treaty of Woodstock) を、締結せざるを得なかったのである⁸⁵⁾。

このウッドストック条約により、グウィネズのコンウェイ川 (the River

85) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 400.

Conwy) 以東は、イングランド領、以西は、イングランドの封土・グウィネズ領になった。

IV 行政改革

ウェイルズ北部で支配地を拡大し続けている一方、フランスのイングランド領、ガスコーニュが危機に瀕しているため、ヘンリー3世は、1248年、総督として、軍事的に潜在能力を持っている義弟・レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを送り込んだ。

1248年当時、ガスコーニュの封建領主は、イングランド王ヘンリー3世であった。

当然、フランス王国内のヘンリー3世の封建領主は、フランス王ルイ9世であった。

法的には、ガスコーニュは、ヘンリー3世の領地であったが、1248年当時の実質的支配者は、ルイ9世であった。

このことに対して、ヘンリー3世は、ガスコーニュを、実質的に自身の支配領地にするため、総督として、義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを送り込んだのである。

だが、この時、敬虔なルイ9世は、キリスト教国圏の一大事として、エルサレム (Jerusalem) に遠征に出た。

というのは、1244年に、エルサレムが、イスラム教徒により、陥落していたからである。

そこで、ルイ9世は、1248年7月末、聖地エルサレムを、イスラム教徒から奪還するため、1人 (君主として1人だけ) で、第6次十字軍 (1248-1254) に出征した⁸⁶⁾。

総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの統治は、1248年の最初から、ガスコーニュの市民から人気がなく、トラブル続きであった。

そのトラブルの原因は、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが

86) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 168.

総督としての役割を果たそうとする余り、圧政となり、ガスコーニュのリーダーたちに反感を買ったからである。

この圧政とは、当然、ガスコーニュ市民への厳格なコンプライアンスと、秩序回復のための重課税とであった⁸⁷⁾。

第6次十字軍に1人（君主として1人だけ）で出征していた、フランス王ルイ9世は、1250年2月、マンスーラの戦い（The Battle of Mansoureh）で、エジプトのイスラム教徒に捕らえられ、捕虜となった⁸⁸⁾。

なお、フランス政府は、ルイ9世の身代金として、金貨500,000リーヴルを、イスラム教のトルコ軍に支払い、同年1250年5月に釈放された⁸⁹⁾。

釈放されたルイ9世は、その後4年間、パレスティナに留まった。

ガスコーニュでの反感は、やがて、反乱となり、総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、1251年5月、この反乱を、武力で鎮めなければならなくなった⁹⁰⁾。

総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、一応、1251年5月、武力によって、ガスコーニュの治安を確保した。

ヘンリー3世は、このガスコーニュの反乱状況を、調査、審理するため、1252年1月、密かに反乱バロンたちを、イングランドに参集させた⁹¹⁾。

なおこの時、ヘンリー3世は、総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールをも、イングランドに呼びつけた。

ヘンリー3世が、ガスコーニュの反乱バロンたちを、イングランドに、密かに参集させ、調査、審理したことは、イングランド王として、当然のことであった。

というのは、フランスでのイングランド領として唯一残っているガスコー

87) · Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 71.

· Cf. Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 110.

88) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 170.

89) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 170.

90) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 72.

91) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 112.

ニュが、内紛によりフランス領になってしまっただけでは、ヘンリー3世自身が掲げている大陸領土回復というアジェンダ（Agenda:政策課題、政策指針）が、阻止されてしまうからである。

また、ガスコーニュのワインは、イングランドにとって、高利益を齎す通商貿易商品であった。

だが、ガスコーニュの反乱リーダーたちは、総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの圧政を、告訴するため、イングランドにやって来たのである。

いわゆる、総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールに対する密告である。

さらに同年1252年に、総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが、ヘンリー3世に呼びつけられ、イングランドに行っている間に、ガスコーニュにおいて、反対派のリーダー、ベアルヌ子爵ガストン（Gaston, Viscount of Béarn）が、反乱を起こしていた⁹²⁾。

ヘンリー3世による審理が、原告人ガスコーニュの反乱バロンたち、被告人総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの出廷のもと、1252年5月9日に、ウェストミンスター＝アベイ内の大食堂で、開催された⁹³⁾。

この審理中に、ヘンリー3世と総督・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールとが相対峙し、大喧嘩となった。

この審理の結果、ヘンリー3世は、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが総督としての能力がないと判断し、更迭した⁹⁴⁾。

なお、ヘンリー3世は、代りの総督に、自身の長男エドワード（後のエドワード1世：Edward I, 1239.6.17-1307.7.7：在位1272-1307）を、任命した。

これに対し、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、ヘンリー3世が、ガスコーニュの反乱軍を抑えることに援軍を送ろうとしなかったり、

92) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 72.

93) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 113.

94) Cf. Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 113.

また反乱軍に同調したりしたことに対して、王への信頼関係が無くなったとして、更迭を受け入れ、1252年9月に、ガスコーニュ総督としての職を辞した⁹⁵⁾。

職を辞しても、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、イングランドからガスコーニュに戻った。

というのは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、フランス国王ルイ9世にとって、またガスコーニュ市民にとっても、人気があったからである。

この総督で実直な義弟である第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを、更迭したことが、その後のヘンリー3世治世の行政改革の端緒となった。

またこの更迭で、時点で、ヘンリー3世とガスコーニュの総督であった義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールとの信頼関係は、修復不可能となった。

この頃、イングランド国内においては、十字軍への遠征費、ガスコーニュへの統治費を捻出するための課税が、恣意的な増税となり、有力なバロンや裕福な市民たちにとって、我慢できない経費となっていた。

マグナ＝カルタを遵守しないヘンリー3世に対して、言い換えると、恣意的な増税や、度重なる失策に対して、有力なバロンや裕福な市民たちは、一層、反王者へととなり、この反王者たちは、増殖し、改革派となっていった。

厳格な神学者、リンカーン司教ロバート＝グロステート (Robert Grosseteste, Bishop of Lincoln, 1175-1253.10.9) は、ヘンリー3世の度重なる失策を危惧し、国王の権力に、ある程度の歯止めをかけるために、友人である第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを、改革派と引き合わせることにした。

1253年に、イングランドに帰って来た第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モ

95) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 72.

ンフォールは、反乱軍、言い換えると改革派のリーダーとして迎えられた。

一方、1254年に、ヘンリー3世は、ローマ教皇インノケンティウス4世 (Innocentius IV, ? -1254.12.7：在位1243-1254) より、神聖ローマ皇帝の支配下にあるシチリア (Sicilia：シシリー Sicily) での教皇権を回復させるため、十字軍遠征の要請を受けた。

教皇に従順なヘンリー3世は、十字軍従軍誓願 (vow) を行い、そして、要請のうち、教皇が、2男エドモンド (Edmund, 1245.1.16-1296.6.5) を、シチリア王にしようとするのと、教皇が、シチリア王マンフレッド (Manfred, King of Sicily, 1232-1266.2.26) との戦いにおいて、もうすでに使ってしまった十字軍遠征費約135,000マルクを、肩代わりすることの申し出を受諾した⁹⁶⁾。

ローマ教皇インノケンティウス4世が、1254年12月7日に亡くなると、ヘンリー3世は、次代ローマ教皇アレクサンデル4世 (Alexander IV, c. 1185-1216.5.25：在位1254-1261) に対し、十字軍従軍誓願を行い、そして、前任教皇との申し出を引き継ぎ、教皇が、2男エドモンドを、シチリア王にしようすることを承諾した。

だが、2男エドモンドがシチリア王国の王位を奪取するには、シチリアを支配していたホーエンシュタウフェン家、神聖ローマ皇帝フリードリッヒ2世の王子コンラート4世 (Konrad IV, 1228.4.25-1254.5.21：ドイツ王 (ローマ王) 1237-1254：シチリア王1250-1254) と戦い征服しなければならず、それには、莫大な戦費が必要であった。

その戦費の捻出先を、当然、ヘンリー3世は、バロンや裕福な市民たちに、求めた。

だが、ヘンリー3世の失策により、イングランド国民の生活が疲弊している時に、さらなる課税を要求したことに対し、第6代レスター伯シモン＝ドゥ

96)・Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p. 134.

・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 106.

・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 72.

=モンフォールを始め、改革派たちが、猛反発した。

そこでヘンリー3世は、1255年でのシチリアへの十字軍の遠征を、断念せざるを得なかった。だが、その戦費の要求は、その後、燻ぶり始めた⁹⁷⁾。

この戦費、すなわちバロンや裕福な市民たちへの戦費要求は、その後のイングランド国内の行政改革、すなわち王権を制限させたオックスフォード約款 (The Provisions of Oxford) の1因となった。

イングランド国内で、改革派が勢力を拡大しているため、逆にヘンリー3世の権力は、縮小し始めていった。

だが、ウェイルズにおいては、ヘンリー3世の統治権が、拡大し始めていった。言い換えると、少なくなったグウィネズ領に、さらなる危機が、生じ始めていたからである。

というのは、4男ダフィズ=アプ=グリフィズが、成人に達し、封建領主であるヘンリー3世にオマージュを執った時、ヘンリー3世が、この4男に少なくなったグウィネズ領の1部を与えるという、アナウンスをしたからである。

この公的な発表に対し、2男ルウェリン=アプ=グリフィズは、きっぱりと拒否した。

この拒否に対し、4男ダフィズ=アプ=グリフィズは、自身の領地を獲得するため、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズを味方につけ、2男ルウェリン=アプ=グリフィズに対し、武力で訴えた。

この武力が、内乱、すなわち1255年6月のプリン=デルウインの戦い (the Battle of Bryn Derwin) になった⁹⁸⁾。

97) Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 78.

98) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 63.

・ Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 75.

・ Cf. Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 400.

・ 2男ルウェリン=アプ=グリフィズ vs. 長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズ + 4男ダフィズ=アプ=グリフィズの兄弟喧嘩は、北ウェイルズ、グウィネズ、国道A487バント=グラス (Pant-glas) 西部、プリン=デルウイン (Bryn Derwin) の丘陵で行われた。

この戦いにおいて、2男ルウェリン=アプ=グリフィズは、大勝し、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズと、4男ダフィズ=アプ=グリフィズとを捕らえた。

捕らえられた長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズは、その後、22年間、幽閉された⁹⁹⁾。

2男ルウェリン=アプ=グリフィズは、長男オワイン=ゴッホ=アプ=グリフィズの領地を、収奪、支配し、実質的に、唯一のグウィネズのリーダーになった。

言い換えると、1255年6月に、ルウェリン=アプ=グリフィズが、北部ウェイルズで、唯一の統治者になったのである。

ヘンリー3世は、ウェイルズでの統治を順調に進めている間、やはりイングランド国内の危機は、増加していた。

この危機を少しでも軽減させるために、教皇に順順なヘンリー3世は、イングランド国内の教会の力を借りなければならなくなっていた。

その教会の力を借りる1手段として、ヘンリー3世は、教皇権の敵である神聖ローマ帝国の力を削ぐこと、言い換えると神聖ローマ帝国の皇位を奪取することであった。

具体的にヘンリー3世は、1256年1月に、神聖ローマ皇帝ヴィルヘルム=フォン=ホラント (Wilhelm von Holland : William of Holland, 1227-1256.1.28; 在位1247-1256 : ホラント伯ウィレム2世 Willem II; 在位1234-1256) が崩御すると、1257年に実弟・初代コーンウォール伯リチャード (Richard, 1st Earl of Cornwall, 1209.1.5-1272.4.2; ローマ王在位1257-1272) を、神聖ローマ皇帝の帝冠候補者に立てた¹⁰⁰⁾。

なお、初代コーンウォール伯リチャードは、選挙のための多額な買収費用 (bribe) を持って、7人の選帝侯により、皇帝に推挙され、1257年5月17日、アーヘンで戴冠し、キング=オヴ=ザ=ローマンズ (King of the Romans: ロー

99) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 63.

100) Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 79.

マ王) になった¹⁰¹⁾。

だが、ローマ王リチャードは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールらによるイングランド国内の内乱（行政改革）により、ローマ教皇から帝冠を、授与されなかったので、神聖ローマ皇帝という称号を得られなかった。

なお、この1257年の同時期に、初代コーンウォール伯リチャードと共に、7人の選帝候により、帝冠候補者に、カステイーリャ王のアルフォンソ10世（Alfonso X, 1221.11.23-1284.4.4：ローマ王在位1257-1275）も推挙された。

だが、このアルフォンソ10世も、ローマ王（King of Romans）の称号を得たものの¹⁰²⁾、ローマ教皇グレゴリウス10世（St. Gregorius X, 1210-1276.1.10:在位1271-1276）の反対により、神聖ローマ皇帝の称号を得られなかった¹⁰³⁾。

一方、ウェイルズにおいて、1258年、ルウェリン＝アプ＝グリフィズが、同じウェイルズ内のケルト系部族国家ポウイスと、デヒューバートとから、臣従礼を受け、ウェイルズ大公（Prince of Wales）という称号を、名乗るようになった¹⁰⁴⁾。

なお、ヘンリー3世は、このルウェリン＝アプ＝グリフィズのウェイルズ大公という称号を、認めていない。

ルウェリン＝アプ＝グリフィズが、ウェイルズ大公を名乗れるようになったということは、ウェイルズ内での治安が安定していったということの意味する。

また、治安が安定するということは、ウェイルズ大公ルウェリン＝アプ＝グリフィズの軍勢力が増加し、反イングランド化が、ヨリ進んで行ったということの意味する。

この反イングランド化の進行が、イングランド国内の情勢を、ヨリ悪化させていった。

101) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 79-80.

102) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 119.

103) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 232.

104) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 63.

というのは、ヘンリー3世が、マグナ=カルタを無視し、ウェイルズへの侵攻、統治権拡大のため、恣意的課税を徴収していたからである。

このウェイルズへの戦い、統治権の拡大においても、ヘンリー3世は、王室のお金を、散財させてしまった。

ヘンリー3世は、王室財政が逼迫し、さらなる戦費を調達するには、グレイト=カウンスル (a great council: 大諮問会)、すなわち議会 (Parliament) から承諾を得るしかなかった。

そこで、ヘンリー3世は、ローマ教皇アレクサンデル4世 (Alexander IV, c. 1199-1261.5.25: 在位1254-1261) から、シチリア (Sicilia: シシリー Sicily) 遠征の要請を、再度受けたため、その遠征費捻出のため、1258年4月2日、国王からの直接受封者であるバロンや、上級聖職者から成るグレイト=カウンスル、すなわち議会を、ロンドンで開催させた¹⁰⁵⁾。

この遠征費捻出に対しても、第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールをリーダーとする改革派バロンが猛反対した。

というのは、エドマンドが、シチリアの王位を継ごうとすることの王位継承戦争に、莫大な戦費がかかるし、また初代コーンウォール伯リチャードによる帝冠選挙のために、多額な買収費用が、掛かっていたからである。

これらの戦費、買収費用は、イングランド国民、特にバロンや裕福な市民にとって、何ら利益を得るものではなかった。

イングランドの将来を考えた反対派たちは、さらなる危機感を持ち、ヘンリー3世と、明確な対立姿勢を見せなければならなくなった。

そこで、マグナ=カルタを認めながらも、ちっとも履行しないヘンリー3世に対し、改革派のリーダーであるレスター伯シモン=ドゥ=モンフォールを始め、改革派バロンや、上級聖職者たちは、オックスフォードに参集し、ヘンリー3世の恣意的な行動を、何某かの成文法で持って、規制、制限しようとした。

ヘンリー3世は、緊急に、もう1度、同年1258年6月11日に、グレイト=

105) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 98.

カウンシル、すなわち議會を、開催せざるを得なかった¹⁰⁶⁾。

というのは、ウェイルズ大公ルウェリン=アブ=グリフィズが、改革派のリーダーであるレスター伯シモン=ドゥ=モンフォールと手を組み、イングランドに反攻し出したからである。

そこで、ヘンリー3世は、ウェイルズの力を削ぐため、ウェイルズを叩くため、イングランドの有力者を、オックスフォードに参集させ、議會を開催させたのである¹⁰⁷⁾。

だが、議會にやって来た有力者たちは、ヘンリー3世の意図とは違っていた。

というのは、その有力者たちは、ウェイルズを叩くことに賛成しに来たのではなく、ヘンリー3世の恣意的な行為を、規制するためにやって来たのである。

オックスフォードに参集した有力者たち、すなわち改革派のリーダー第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォール、グロスター伯リチャード=ドゥ=クレア (Richard de Clare, 6th Earl of Gloucester, 1222.8.4-1262.7.14)、バロン、上級聖職者たちである。

バロン改革派たちは、危機感を持ち、自分たちの強い反対意思を表すために、武装して、議會に現れた。

武装して議會に出席するということは、異常なことであり、この議會は、「マッド=パーラメント (The Mad Parliament : 狂気議會)」といわれる¹⁰⁸⁾。

このマッド=パーラメントで、バロン改革派のリーダー第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールは、ヘンリー3世に対し、国政改革、つまり行政改革の要綱を作成するため、自身をも含めた24名のバロンから構成される議會を設置するよう要求した¹⁰⁹⁾。

106) この1258年頃から、グレイト=カウンシル (a great council : 大諮問会) は、議會 (Parliament) という言葉に替わっている。

・ Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 101.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 137.

107) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 99.

108) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 99.

109) Cf. T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 99.

この24名のバロンから成る行政改革要綱作成議会の委員の内訳は、12名が国王ヘンリー3世により選出されバロン、残りの12名は、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールを含めた一般バロン（シチリア遠征費に反対するバロン）であった。

また、バロン改革派のリーダー第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、もしこの議会の設置要求が、受け入れられなかったら、シチリア王国への遠征に対し、何の援助もしないと、ヘンリー3世に、プレッシャーをかけた。

この24名のバロン行政改革要綱作成議会は、オックスフォード約款（The Provisions of Oxford）を起草した¹¹⁰⁾。

ヘンリー3世は、同年1258年7月、このオックスフォード約款の起草を誓約し、署名した¹¹¹⁾。

言い換えると、ヘンリー3世により、このオックスフォード約款、すなわちバロンによる行政改革案が、承認されたということである。

ヘンリー3世の署名により、このオックスフォード約款は、法的拘束力を持ち、そしてイングランドのガバナンスが、15人のバロン委員に委任される1つの改革議会が、設置された¹¹²⁾。

当然、この15人のバロン改革議会の中に、改革派のリーダー第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールが含まれており、彼が主導的な立場を取り、また彼らが、ヘンリー3世の権力行使に対し、アドヴァイスを行う役目を負った。

言い換えると、15人のバロン改革議会が、ヘンリー3世の権力を奪い、ヘンリー3世を、改革議会の統制下に置くということである。

さらに言い換えると、この15のバロン議会が、イングランドのすべての行政管理を任されたということである。

そこで、この15人のバロン改革議会は、王が招集するか否かにかかわらず、

110) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 100.

111) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, Trafalgar Square Publishing, 1992, p. 109.

112) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 99.

年3回、すなわち9月29日のミカエル祭、2月2日の聖燭節、6月1日に開催され¹¹³⁾、すべての外国人をイングランドの要職から外した¹¹⁴⁾。

また、この15人のバロン改革議会は、チャンセラー (the Chancellor : 国璽尚書) とトレジャラー、エクステーカー (the Treasurer, and the Exchequer : 財務長官、出納法院) を監督下に置き、ジャスティシヤー (the Justiciar : 司法長官) や王城の城主 (the keepers of the castles) を任命した¹¹⁵⁾。

これら15人の改革議会の政策は、すべて少数バロン中心のものであった。

言い換えると、1258年7月のオックスフォード約款においては、少数のバロンがイングランド政治の中枢に就き、寡頭政治を行うということであった。

これに対し、行政改革案に同調し、協力していたシャイアのナイト (knight of the shire : 州の騎士) が、不満を抱き、反発し出した¹¹⁶⁾。

1258年7月のオックスフォード約款は、バロンのための行政改革案であって、真の行政機構を改革するものではなかった。

そこで、改革派のリーダー第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、このオックスフォード約款にある程度の修正を加えなければならなくなった。

すなわち、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、ナイトの不満を考慮し、徹底した改革、すなわちオックスフォード約款をより強化したウェストミンスター約款 (The Provisions of Westminster) を、1259年10月13日に作成した¹¹⁷⁾。

113) ・ David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1953, ed., Routledge, 1981, p. 366.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 137.

114) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 100.

115) ・ Cf. David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 363-364.

・ Cf. Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 136-137.

116) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 148.

117) ・ David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 370.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 146-147.

丁度この同年1259年に、フランスでのイングランド領問題で、一定の解決があった。

それは、ヘンリー3世にとっても、ルイ9世にとっても、敬虔なカトリック教徒であるが故に、キリスト教国圏の安定、和平が、重大事項であり、両国における領土問題は、第2の事項であった。

それゆえ、ヘンリー3世は、領土問題は気になるが、争う時期ではないと判断し、ルイ9世に対し、オマージュ (Homage:臣従礼) を執ることにより、1259年12月4日、パリ条約 (Traité de Paris : The Treaty of Paris) が締結させたのである。

このパリ条約は、最終的な領土問題を解決していなかったため、その後イングランド vs. フランスの百年戦争 (the Hundred Years' War) の端緒となった¹¹⁸⁾。

このパリ条約の締結の実際の交渉人は、第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールである。

というのは、この当時、ヘンリー3世は、ウェストミンスター約款により、王権を規制されていたからである。

そこで、ヘンリー3世と第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォールとは、フランスに赴き、フィリップ2世 (Philippe II, Auguste : オギュスト尊厳王、1165.7.21-1223.7.14: 在位1180-1223) とジョン王治世時代から懸案であった領土問題を、解決のため交渉し、パリ条約が成立、締結されたのである。

この1259年12月4日のパリ条約により、ヘンリー3世は、フランス王の封土の一部としてガスコーニュを、領有することになった。その代わりに、ヘンリー3世は、ノルマンディー、アンジュー、メーズ、トゥレーヌ、ポワトゥーの相続権を最終的に放棄せざるを得なくなった¹¹⁹⁾。

フランス交渉から戻った第6代レスター伯シモン=ドゥ=モンフォール

118) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 105.

119) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 105.

・David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 376-379.

は、ウェストミンスター約款を、現実的なものにするために、一層、改革に力を入れ出した。

第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの意を酌んだヘンリー3世の王子エドワード（Edward, 1239.6.17-1307.7.7：後のエドワード1世 Edward I, 1272-1303）は、改革派を支持した¹²⁰⁾。

だが、改革派のグロスター伯リチャード＝ドゥ＝クレアは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールと意見の食い違いから不和となり、改革派を去り、保守派バロンの王党側についた¹²¹⁾。

イングランド国内では、ウェストミンスター約款に対し、今度は、保守派バロンが不満を訴え出した。

すなわち、シャイアのナイトをも含んだ第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの改革派バロンと、ヘンリー3世を支持する保守派バロンとの対立である。

王権を規制、制限されていたヘンリー3世は、保守派バロンと手を結び、1258年のオックスフォード約款と1259年のウェストミンスター約款との誓約を破棄するために、ローマ教皇アレクサンデル4世から、死の直前の1261年4月13日に、教書を貰った¹²²⁾。

この教書により、法的に自由になったヘンリー3世は、以前と同じように恣意的な権力を行使し始めた。

これにより、ヘンリー3世の保守的封建派と、ナイトを含む第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの改革派との内乱が、激化し始めた。

この内乱を鎮めるために、当時ヨーロッパ内で、紛争の解決者と言われていたフランス王ルイ9世が、調停に当たった。

その調停の結果、ルイ9世は、1264年1月23日アミアン協定（Mise of

120) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 108.

121) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 108.

122) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 109.

123) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 112.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 183.

Amiens)を下した¹²³⁾。

このアミアン協定は、ルイ9世が、フランス王であるが故に、改革派のバロンが増加すると、君主政治に影響を与えるので、保守派バロンが支持するヘンリー3世擁護の立場で、下された。

この協定により、1258年のオックスフォード約款と1259年のウェストミンスター約款とが、破棄されたことにより、改革派のバロンたちが、分裂し、エドワード王子を含め、多くのバロンたちが、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールから離れていった。

協定に納得のいかない改革派のリーダー第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、自身の行政改革意思を貫き通すために、ヘンリー3世と戦うことにした。

その戦いは、1264年5月14日、サセックス南部での戦い、すなわちリュイスの戦い (the Battle of Lewes) となった¹²⁴⁾。

このリュイスの戦いは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォール、改革派バロン、ロンドン市民の民兵と、ヘンリー3世、エドワード王子、初代コーンウォール伯リチャードとの内乱になった。

この内乱は、第2次バロン戦争 (the Second Barons' War, 1264-1267) への始まりである。

このリュイスの戦いにおいて、ロンドン市民から支持を得ていた改革派のリーダー第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、ヘンリー3世と、その王子エドワードを捕らえ、捕虜にし、勝利した¹²⁵⁾。

勝利した第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、実質的にイングランドの支配者になった。

だが、リュイスの戦い後、多くのバロンたちが、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールから去ったので、彼は、改革派と王党派との妥協的な、

124) ・ T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 115.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 189.

125) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, pp. 100-101.

また民衆から受け入れられる政治を行わざるを得なくなっていた。

このことは、1265年1月20日のパーラメントにおいて、上級聖職者とバロンを含め、各州から2人ずつのナイト（騎士）、ヨーク、リンカーン、その他に選ばれた城市から2人ずつの市民を、招集したことから分かる¹²⁶⁾。

この市民が、パーラメントにおいて、上級聖職者、バロン、ナイトと同席するのは、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールのパーラメントがイングランド史上初である。

この史上初が、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールに、災いを齎した。

というのは、この市民を含めた議員たちが急激な改革を行い、バロンたちに危機感と不安とを煽ったからである。

このバロンたちの危機感と不安は、当然、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールへの反感、反抗へと、繋がっていった。

やがて、そのバロンの反感、反抗は、王子エドワードが、1265年5月28日、監禁から脱出した後¹²⁷⁾、バロンたちが、王子のもとに集まり、争いへと変わっていった。

その争いは、1265年8月4日、イヴシャムの戦い（the Battle of Evesham）である。

このイヴシャムの戦いにおいて、第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、エドワード王子に敗北し、1265年8月4日に殺害された¹²⁸⁾。

勝利したエドワード王子は、父ヘンリー3世をも勢力下においていたので、イングランド国内の安定のため、叔父の第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールの政治的、経済的良い点を受け継いだ。

そのことは、父ヘンリー3世の行政にも現れた。

すなわち、ヘンリー3世は、以前のように恣意的な王権を行使するの

126) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.

127) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 124-125.

128) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 202.

ではなく、1259年のウェストミンスター約款の主要部分を、ヨリ現実的に適するように再交付された1267年のモールバラ制定法 (the statute of Marlborough) を、認めるようにした¹²⁹⁾。

このモールバラ制定法を、ヘンリー3世が認めることにより、バロン戦争、すなわち第2次バロン戦争 (the Second Barons' War, 1264-1267) が終結したのである。

また、このモールバラ制定法により、イングランドの治安は、安泰した。

この安泰した時期に、エドワード王子は、エルサレム (Jerusalem) に遠征に出た。

エドワード王子の十字軍遠征の時に、ヘンリー3世は、1272年11月16日、66歳、ウェストミンスターで息を引き取った¹³⁰⁾。

V おわりに

ヘンリー3世がイングランドの王位を継承した時は、わずか9歳の時であった。当然、摂政が引かれた。

摂政に就いた初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルは、まず初めに、フランス皇太子ルイを、イングランド国外に追い出し、イングランドを、経済的に安定した国に導いた。

その後の摂政ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラも、未成年のヘンリー3世を助け、イングランド行政を、良い方向に導いていった。

言い換えると、初代ペンブルク伯ウィリアム＝ザ＝マーシャルも、ケント伯ヒューバート＝ドゥ＝バラも、ヘンリー3世に、身の危険を及ぼせることなく、イングランドの司法、行政を巧みに指導し、経済を破綻させることなく、イングランドを統治していたのである。

ヘンリー3世が成人に達し、国政に携わっていくと、彼自身の利己心が表面に出て、国政の中核部分を外国人に任せたり、財政問題を気にもせず、ウェ

129) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 134.

130) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. ibid.*, p. 135.

イルズへの討伐を行ったりして、イングランドを、悪い方向に向けていった。

特に、ヘンリー3世が熟案せず、即断した政策、すなわち勝ち目のないフランスでの失地回復への失策、ウェイルズへの成果の出ない遠征、恣意的な課税、等である。

この時、ヘンリー3世の取り巻き、行政の重鎮は、すべて外国人の縁戚関係者であった。

この重鎮の誰か1人でも、早いうちにNO!の言える人がいたら、後世の評価も変わっていたであろう。

だが、その後、このイングランド行政の悪化に、心病んで自ら改革に乗り出したのは、ヘンリー3世の義弟・第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールである。

第6代レスター伯シモン＝ドゥ＝モンフォールは、ヘンリー3世の権力を、公的に規制を与えるために、国王からの直接受封者であるバロンや、上級聖職者から成るグレイト＝カウンシルを、市民の代表が出席する議会の力に頼った。

この議会の創設が、ヘンリー3世治政治における最大の行政改革であった。

なお、この議会の創設に、ヘンリー3世は、何ら関わっていなかったが、ヘンリー3世の利己心、失策、恣意的な重課税の反動として、この議会が創設されたのである。

さらに、この議会の良いところは、エドワード王子、その後のエドワード1世に受け継がれていった。